

今こそ

# 改・革・の・時



市役所本庁舎の清掃作業を職員の手で実施しています。  
※就業時間終了後  
年間約550万円使われるお金が削減されます。

## 取り組む行財政改革

いま、七尾市の家計は「入ってくるお金」よりも「使われるお金」が多い、ゆとりのない生活を送っています。

しかも、現在「入ってくるお金」の約30%を占めている「地方交付税(国から支払われる)」が段階的に減らされていき、合併した年(H16)から数えて、15年後には、現在の金額より約13億円も少なくなることが予想されています。

「ゆとりがない生活」に加えて「入ってくるお金」が減ることになります。

このままでは、間違いなく家計をやりくりすることができなくなり「財政破綻」となる可能性が、あると言わざるを得ません。

しかし、この状況を前向きに考えれば、これまでのように国などに頼らないで、自立した七尾市へ、生まれ変わる「絶好の機会」です。

そこで、七尾市ではピンチをチャンスに変えるために、平成17年度から「市民とともに歩む、開かれた行政運営」「市民ニーズに対応できる簡素で効率的な行政体制」「健全な財政運営」の3本柱を軸に行財政改革プランを掲げて、さまざまな改革に取り組んでいます。

### <平成17年度の主な取り組み結果>

- ・職員数を削減/継続中  
(実績: 17人削減)
- ・三役などの特別職の給与を削減/継続中  
(実績: 市長・助役△10%、教育長△8%  
年間約382万円削減)
- ・管理職手当の削減/継続中  
(実績: 部課長など一律△10%  
年間約437万円削減)
- ・職員の給与の削減/継続中  
(実績: 本俸と期末勤勉手当一律△3%  
月額約1,330万円削減)
- ・公共施設の管理経費を見直し削減/継続中  
(実績: 水道や電気使用を節減するなど、  
月額約1,355万円削減)
- ・利用していない市有地を売却/継続中  
(実績: 7物件を総額3,270万円で売却)

市民は改革のキーパソン

行財政改革は、行政の一方通行では成功はありえません。

改革の枠組みの中に、市民のみなさんが単に加わるのではなく、お互いに情報を共有し対等な関係で、緊張感を保ったパートナーとして力を合せて取り組んでいかなくてはなりません。

成功の重要な「鍵」の一つを握っているのは、まぎれもなく市民のみなさんです。

改革を進める過程で、どれだけ市民のみなさんに理解と参加を得られるのか、そしてみなさんの意志がどれだけ多く反映されるのか、それがまったくなければ改革ではなく、単なる行財政規模の縮小に終わってしまいます。

これまでの取り組みは、「市役所だけで取り組めること」「市民のみなさんに負担をお願いすること」を中心に進めてきました。

これからの取り組みは、「市民ができることは自らの手でやってみよう」など、行政と市民の役割分担を見直していかなければならないと考えています。

ともに将来のまちを思い描きながら、知恵を出し合って、工夫し、「依存」から「自立」そして「協働」のまちへと改革を進めましょう。

<平成18年度からの取り組み>

- ・公共施設の指定管理者制度の導入
- ・市税の収納率の向上
- ・ごみ袋の値上げ
- ・広報、HPへ有料広告を掲載

<これから取り組むこと>

- ・小中学校の通学区域のあり方の検討
- ・地域コミュニティ活動の自立促進
- ・類似施設の統廃合

セカンドライフに  
選んだのは、市民活動

萬行嘉子さん（作事町）

人生に第1も第2もない、しかし望む、望まないにかかわらず転機は誰にでも訪れるもの。

長年、市役所の職員として保育行政の第一線で働き、晩年は課長職として市政に尽力された萬行嘉子さん。

定年退職後、彼女が選んだセカンドライフは“市民活動”だった。

きっかけは、広報ななおに掲載された“おもちゃ図書館の運営ボランティア募集”の文字、目にした瞬間「自分の経験を活かせるかもしれない」と思ったと話す。

活動した感想について「とても楽しい、子どもたちの笑顔に出会い、そして喜ぶ姿を見ていると、幸せな気持ちになれる」と、すてきな笑顔で話す。

市民活動に対して「行政は結果を求めすぎて、押しつけてはいけません。市民は活動するからには、しっかりと責任を持つこと。そうしないとお互い楽しくなくなる」と提言してくれました。

これからも“地域による子育て”という活動を通して、充実したセカンドライフを満喫することでしょう。



活動する、  
共通の理由は、  
楽しいから。

協働を探求し、  
まちづくりに挑戦

森山奈美さん（鍛冶町）

近年、自治体運営や市民活動において、全国で声高に協働が叫ばれている。

ここ七尾市において、協働をいち早く探求し、自らが描くまちの実現にむけて活動している森山奈美さん。

これまでの七尾市の取り組みに対して「市民にボランティアへ参加してもらったり、意見を聞いたりしているだけ、協働を誤解している」と厳しく指摘する一方で、「新成人を中心とした市民組織と行政がともに運営している七尾地区の成人式は評価できる」と話す。

七尾市が、協働をまちづくりのシステムとして構築するには「成人式のように実践的な機会を増やし、実績を積上げる過程で、仕組みや制度を組み立てていくべきだ」と提言する。自分自身の活動を「時には辛く感じたこともあるけど、人との出会いや気づけなかったまちの魅力を再発見できたなど、楽しいことの方が多かった」と笑顔で振り返る。

最後に「自分のまちを楽しくするのは自分自身だよ」と、市民のみなさんにエールを送ってくれた。

